

環境と人

川本 義勝 (かわもと よしかつ/きなり村取締役村長)

私の環境力って???問うて見る。私の環境との係わり合いは株式会社カンサイに入社して始まった。1972年7月結婚して約1年目若干26歳であった。髪は7:3に分けその頃のファッションはアイビー룩が終焉しつつある時代でもあった。経済は第一次石油ショックも終わりかけ景気回復基調が見えつつある1974年当時であった。環境的には1970年代で公害国会と廃棄物処理法制定と環境衛生から理工学への移り変わる時でもあった。

その頃の私の仕事は、し尿処理施設の消化槽の清掃委託を請負う官庁営業でもあり、一作業員でもあった。当時の日本のし尿処理は消化処理嫌気消化処理が大半で、前処理が不十分なかたちで処理されていて槽内に夾雑物がたまり処理が円滑に行われない状態が起きるため、5年に一回槽内清掃を行う必要性があり、その仕事を中四国地域を拠点に営業展開していた。仕事を取るためには作業の仕様書を書き、見積もり積算と想定堆積量の積算を作るなど、現場と営業、設計のすべてを行わなければならない苦勞をした。今思えば懐かしく思いだされるが、とにかくがむしゃらに仕事をした。(株)カンサイも成長期の日本経済に支えられ順調に売り上げを伸ばしつつある頃だった。

ちょうどその頃、ヨーロッパに建設省の下水道の視察のためにイギリス、ドイツ、フランス、イタリア、デンマークに行く機会があり、胸を弾ませて出かけた。その頃日本のマスコミ各誌ではヨーロッパは環境先進地とのふれこみがほとんどだったが、私の視察感想では規模さえ違うものの、日本の処理施設の細やかさと技術や処理能力はけ

して劣るものではないことを知り安堵したことを今でも思い出す。その頃の教訓としては、若さゆえがむしゃらに働く事、そして何事にも興味と言うか問題意識を持つことの大切を学んだ時期だった。

ヨーロッパから持ち帰った技術としては廃棄物の事前分析の必要性と積荷目録(マニフェスト)だった。そして、その後の事業展開において廃棄物業界において逸早く分析業務を自社で行い、マニフェストも自社開発による電子マニフェストシステム構築等に役立てることが出来た。そして、この頃の私は、常日頃から環境ってなんだろう人ってなんだろう 自然ってなんだろうと自問自答した頃でもあった。

近年私の環境に対する生き方については、きなり村を立ち上げ、自己完結な空間の場として人を核にした循環とは何か、修復型の環境ではなく未来志向的な環境、楽しむ環境であったりアートの環境を生み出す力こそ**環境力**であるよう思う。これから先の環境問題を考えた時に、全ての人が自然を楽しみ、人であることを楽しまなければ意味がないと思っている。

「**環境の善し悪し全て人なり**」。私は65歳を期にきなり村の村長として次世代への継承と人生を楽しむ事ができる環境への取り組みとして、今、きなり村でエネルギーの自己完結と農業の復活をテーマに頑張って、みんなが楽しめる幸せな**環境力社会**を夢見ている。

最後に、環境力大賞受賞に当り関係各位にお礼申し上げます。